

銅板プレートと 市川清作



みなさんは明治村の建物の幾つかに、銅板のプレートが掛かっていることをご存知でしょうか?これは移築銘板や修理銘板と呼ばれるもので、館内の柱や梁などの目立たない場所にひっそりとあり、また見学者が入れない場所に掛けられていることもあるため、知らない人も多いかも知れません。

プレートには小さい文字が刻字されていて、その建物に関わった人々の名前や、移築・復原とそれに伴う補強、管理上の処理などの記録が書かれています。専門的な用語も多く、また目につかない高い場所にあることも多いため、じっくり読むのは難しいかも知れませんが、建物にまつわる詳細な情報が得られる貴重な資料となっているので、見つけた時にはぜひ眺めてみて下さい。

ところで、それらプレートの工事主任の欄のほとんどに「市川清作」の名が残されています。市川は大工出身の技術者で、戦前から寺院建築などの伝統的建造物の修理に携わり、名古屋市の建築課技師や松本城の修理工事事務所長を経て、明治村建築委員会のメンバーとして招聘されました。

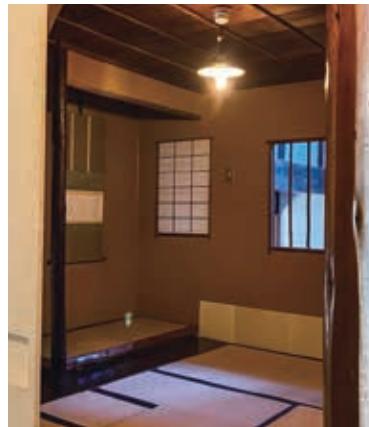
市川は明治村の工事に合わせて犬山に居を移し、ほぼ毎日現場に足を運んでいたそうです。寡黙で自らの意見を述べることは少なかったという職人気質の技術者が、明治村の建設工事に尽力していたことを、プレートは静かに称えています。



photo:Hisao Takeuchi/Ryota Murase

和風建築

日本は古来から独自の建築文化を持ち、
民家、寺社、城郭、茶室などさまざまな建物をつくってきた。
幕末から明治にかけて、近世の禁令が緩和されると、
堰を切ったように豪華な建築が広く登場し、
それらには西洋建築の構造やデザインの影響も見られた。



2階の茶室。窓の先の吹き抜けが青白く色づく

豊潤な空間

茶室のある2階を奥側へ折り返すと、3階には数寄屋風の部屋がふたつスキップフロア状に続き、高低差のある部屋同士は下地窓でつながっています。最上部は茶室のようになつていて、戸袋には滑車があり、これは水屋の役割を果たしたと考えられます。

増改築と迷宮化

東松家住宅は、城下町名古屋の中心を流れる堀川沿いにあった町家で、元は油問屋を営み、明治20年代後半から銀行業を開始しました。建物としては、江戸末期に創建された頃は平家で、銀行業を始めた時に建物を曳家して2階を増築、さらに明治34年に3階を増築したと考えられています。複雑な空間構成はこのような経緯とも無関係ではありません。また、正面だけ黒漆喰塗りの外観は、江戸時代の防火対策のために用いられた塗屋造という形式です。堅牢な格子窓が3階まで立ち上る姿が、銀行の重厚な雰囲気を漂わせています。

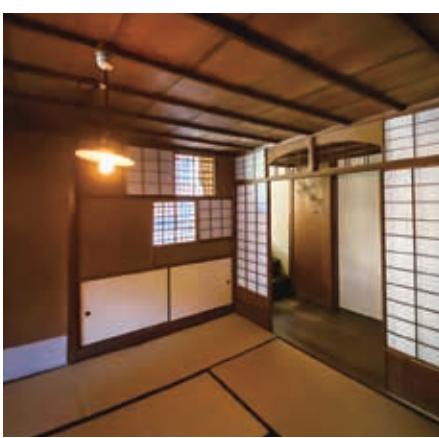
尾張の茶文化

建物に足を踏み入れると、奥まで続く通り土間に沿って、ミセやブツマ、奥座敷が並ぶ平面構成となっていますが、中戸の先まで進むと、3層まで吹き抜けのとても天井の高い空間が広がります。

よく見ると上空には斜めに張り出した渡り廊下があり、これは2階に設えられた茶室のための露地となっています。尾張地方はお茶の文化が盛んで、このような屋内に設えられた茶室で日常的にお茶が楽しめたそうです。

描かれた雀の絵です。飛び立つ雀の姿が吹き抜けの上昇性と重なって、不思議な浮遊感を感じさせてくれます。

東松家住宅の取り壊しを聞きつけた明治村は、建物の譲渡を何度も願い出たといいます。それを強く求めたのは建築家の谷口吉郎でした。移築された東松家住宅の豊潤な空間を体験すると、谷口が何としても残したかった気持ちがよく分かります。



スキップフロアのような3階。奥に杉戸板も見える



東松家住宅の外観。3階建て塗屋造の堅牢な姿だが圧迫感はない。また側面は杉皮張りとなっている

photo:Hitoshi Kumamoto

東松家住宅

谷口吉郎が惚れた、3階建ての町家

立体パズルのような町家

明治といえば洋風建築が注目されがちですが、実は江戸時代から続く和風建築もこの時代に大いに発展し、たくさんの名作が誕生しました。身分差による禁令が撤廃されたことで、贅沢な建築が各地で建てられたからです。東松家住宅もそんな建物のひとつで、3階建ては慶応3年頃から大正8年までの約50年の間に登場した、珍しい姿の町家です。



通り土間の吹き抜け。高窓の光が漆喰壁に反射して明るい



photo:Akihiko Mizuno/Hitoshi Kumamoto

清水医院

擬洋風の外観と数寄屋の内観が同居する、隠れた名作

小さな名作

2丁目のレンガ通りの緩い傾斜を進むと、正面に東山梨郡役所が見えます。そのすぐ脇に、蔵のような姿にアーチ窓が開けられた清水医院があります。どちらも洋風建築を模したデザインのため、東山梨郡役所に付属する建物のようにも見えますが、清水医院はその規模からは想像できない豊かな空間を内に秘めた、隠れた名作です。



診療室の風景。アーチ窓からの光が印象的

和洋折衷の医院

清水医院は旧中山道の宿場町須原で開業した医院で、かつてはこの建物の後ろに病棟や主屋、蔵などがたち並んでいました。宿場町の中でもハイカラだったという外観は、漆喰に目地を入れて石積みのように見せたり、またコーナーには柱形をあしらうなど洋風建築が意識され、とりわけ1階と2階で大きさも間隔も違うアーチ窓の存在が目をひきます。

その一方で、構造は木造に漆喰を塗った土蔵造りで、屋根は羽葺き、また袖壁のついた開口部は奥へ続く土間となつていて、造りや空間

アーチと数寄屋
清水医院の一番の見どころは2階の座敷です。間口8・7m、奥行き5・4mの小さな空間に3室の座敷があり、それぞれ数寄屋の意匠が散りばめられています。また障子や襖を開けると、ひとつながりの明るく開放的な空間へ変貌するのも魅力です。

特に興味深いのが正面側のアーチ窓の効果です。脇の高さから立ち上がるアーチ窓が数寄屋造りの空間に不思議な景色を生み、また腰を下ろすと浮かんでいるような感覚を味わうことができます。座敷には炉が切られ正在ことから、ここでお茶が楽しまれた様子がうかがえ、山深い旧街道沿いでこれほど趣ぎのある座敷があつたことに、小さな感動を覚えます。

構成は和風建築であることがわかります。

土間から上ると待合室の奥に診察室があり、そこには医療品が並ぶ木製の戸棚や、古びた机に回転椅子、小ぶりなベッドが置かれ、あたりに日姿が再現されています。

そこへ大きなアーチ窓から入る光が、診察室の設えを浮かび上がらせて、静物画のような美しい光景をつくり出しています。

軽やかなファサード

清水医院の外部と内部の印象が異なるファサードからは、現代建築とも通じる表層的で自由なデザイン性を感じます。またアーチ窓から注ぐ光が内部を明るく照らし、反対に室内からは開放的な眺めが得られる点も、現在と共通する空間構成を感じさせます。

そんな清水医院ですが、移築前にはかなり手が加えられて、今に見られる姿とはかけ離れていました。そのような状態でも建物の魅力と価値を見抜いて保存を求めていた人々に改めて尊敬の念を抱かずにはいられません。



もうひとつの座敷。天井の造作に注目（通常非公開）

明治30年代／1973年（昭和48年）移築
木造2階建
「旧所在地」長野県木曽郡大桑村須原



湯殿と化粧室も凝った空間で見応えがある

大臣を務めた、明治後期から昭和初期を代表する政治家です。20代の頃にはフランスへ長期滞在し、パリ大学で法学を学ぶかたわらで民主化運動を目の当たりにしたり、先進的な文化人のサロンにも出入りするという、異色の経験も積んでいます。

興津へ坐漁荘を構えたのは老後のことで、政界引退後も元老として影響力のあった西園寺の元へは多くの政界人が訪れたといい、そんな来客をもてなす場としても使用されました。などの凝ったディテールが目に飛び込み、この

建築が只者ではないことを伝えてくれます。魅力的な飾り台のある畳廊下の向こうには居間があり、興津の頃の美しい庭の眺めが復原されています。ここで注目したいのが縁側の板戸です。板戸は洋間とつながり、反対側は古裂を張った設えとなつてリバーシブルで表情を変える面白いデザインとなっています。

その洋間も、不規則な梁の天井や暖炉の横に浮かぶ棚、乳白色のステンドグラス窓などが数寄屋の手つきでまとめられた、不思議な空間となっています。

趣向の凝らされた部屋の中でもっとも格式が高いのが2階の部屋です。特に欄間にはめこまれた割竹の意匠は細部技巧の極みです。そして何より、この部屋からの眺めが最高の見せ場で、西園寺が愛した清見湯の風景が現今は入鹿池で見立てられています。

その他にも、庭に面した外観にふんだんにガラスを用いたり、電気設備の導入や耐震性を考慮して鋼材を併用するなどの近代建築的な工夫も特徴です。

近代数寄屋建築の粋

女中部屋への配慮と新しい魅力

坐漁荘にはもうひとつ魅力があります。それは、女中部屋や台所など使用人たちが働く



1階の台所の風景。窓が多く清潔感がある

1920年(大正9年)／1971年(昭和46年)移築
木造2階建
「旧所在地」清水市興津清見寺町



北西側からの鳥瞰。紅殻塗りの板壁の先に屋根が連なり、2階の座敷が頂点となる。その向こうには入鹿池が広がっている

西園寺公望別邸「坐漁荘」

西園寺公望が愛した、近代数寄屋建築の傑作

終の住処

3丁目の高台には、明治村の和風建築の中でも異彩を放つ坐漁荘がたっています。紅殻が向かって軒を重ねる邸宅の姿が概観できます。また広い砂利道は旧所在地の東海道の眺めを思わせて、ここが明治村内であることを瞬忘れさせます。

坐漁荘は元勲と評された西園寺公望の終の住処で、煎茶に造詣の深かつた主人の趣味が行き届いた、近代数寄屋建築の傑作です。

最後の元老

西園寺公望は、伊藤博文らと共に大日本帝国憲法の策定に関わり、また2度の内閣総理



1階の洋間。壁面の左が古裂の貼られた板戸

特別寄稿

明治村を支える人々

2

石川新太郎さん(博物館明治村修理工事者)



西園寺公望別邸「坐漁莊」の復原した揉み唐紙の襖。近年、このような近代数寄屋建築の評価が進んでいる

1974年生まれ。京都大学大学院卒業後、カタルーニャ工科大学へ留学。博物館明治村へ勤務後は芝川又右衛門邸の移築復原工事をはじめ、多くの建物の修理工事に携わる。近年、修理工事を担当した西園寺公望別邸「坐漁莊」が国指定重要文化財に指定された。

修理技術者として

私は明治村に勤める前、スペインのカタルーニャ工科大学に留学していました。もと京都大学大学院では、歴史的建造物に対する構造補強に関して実験を中心とした研究を行っていました。卒業後は、海外の歴史的建造物保存について、より広く学びたいと思い、スペインのバルセロナに留学しました。

明治村で最初に関わったのは、芝川又右衛門邸の移築復原工事です。株式会社魚津社、寺工務店の協力で進められた事業だったのですが、現地で解体されてから移築復原工事の



石川新太郎さん



芝川又右衛門邸の移築復原工事の様子

今後の課題

築対象とされた建物は、創建から解体時までに増改築が繰り返されている建物が多く、これら的情報を整理して限られた期間で事業を進めるには多くの困難があったであろうことを想像します。

明治村は、明治時代の空間を伝える博物館という側面を強く持っています。このため、基本的には、修理工事の際に建築意匠を変更することは行いません。また、部材の取替や修理の際の工法を選択する場合も、可能な限り在来の技術を踏襲することを目標としています。

ただし構造補強などが必要となる場合、人の目に触れない箇所においては現代の工法に頼る場合があります。その際には、当館の修理工事者スタッフ間をはじめ工事関係者内で議論を行います。

今後の課題は、解体移築 당시に十分に調査・復原出来なかったことについてどのように扱うかということです。現在は、大規模な修理工事を行う際に、改めて調査をして復原

着手までに10年ほど時間が経っていました。そのため、倉庫に積まれた各部材は、建物のどの部分に該当する部材であるかが分からなくなっていました。また、中には腐朽して再利用できなかつた部材もあり、残された図面や野帳をもとに部材を選別・清掃するという作業からはじめました。

そこから想像すると、飯田先生たちが移築復原した頃は大変だったと思います。移



西園寺公望別邸「坐漁莊」の耐震補強金物、昭和の増改築時に施されたと考えられる。当時から補強を見せない工夫が施されている

重要文化財
指定年月／1984年12月



奈落の風景

残り、歌舞伎以外に芝居や落語、浪曲、講談、漫才などが上演され、また政治の演説会の会場としても使用された、市井の人々にとって身近な存在でした。

江戸のカラクリ建築

呉服座の建築的な魅力は、芝居小屋の空間構成や舞台演出装置などのさまざまなギミックも復原されていることです。

小屋組と年代特定

主屋に配置されています。客席は舞台を正面にして、梁間10mの吹き抜けを中心に行けられ、1階の舟席を平場、1、2階の両脇に上下の桟敷、2階正面の向桟敷で構成されています。いずれの席も傾斜がつけられ、舞台が見

しで構成され、舞台や客席など広いスペースは建築は、切妻屋根の主屋と三方を取り巻くひさしで構成されています。客席は舞台を正面にして、梁間10mの吹き抜けを中心に行けられ、1階の舟席を平場、1、2階の両脇に上下の桟敷、2階正面の向桟敷で構成されています。いずれの席も傾斜がつけられ、舞台が見

やすいよう工夫されています。

明治に残った江戸の賑わい

そんな客席の周囲には花道など目に見える舞台装置以外に、舞台脇の離子小屋や寄席後部に楽屋があり付けられ、また花道の下には奈落と呼ばれる隠し通路が走っています。極め付けは舞台中央の廻り舞台で、地下の中心軸と車で支えられ、人力で回されていました。

さまざまな機能が作り付けられた構成から、芝居小屋はまるで大きなカラクリ建築のようです。

もうひとつ、呉服座の秘密の場所をご紹介しましよう。それは太鼓櫓に登るはしごから

の小屋組の眺めです。暗闇に無数の束がすうっと立ち上がる姿は、この世ならざる何かが棲んでいそうな神秘的な雰囲気を感じます。

移築当時、呉服座は明治初期に建てられた

後に猪名川へ移されて、小屋組の一部はその時に洋小屋へ変更されたと考えられています。ところがその後の調査で、小屋組の形式や使用されている金物から建設年代が特定され、屋根も杉皮葺きへ戻されました。普段目につかない場所には、このような歴史の証人が隠れていることがあります。

個性的な建物が集まる明治村の中でも、呉服座とその前の広場のような空間は、少しだけ異質な空気が流れています。ここだけいつも縁日のような風情が漂っているからです。呉服座は明治中期に建てられた芝居小屋で、元は大阪の猪名川の河岸にたっていました。縁日の風情を感じるのは、太鼓櫓から吊られた提灯や外観を飾る絵看板、人力車と写真スポット、そして小泉八雲避暑の家で売られている駄菓子も良い引き立て役となっています。からでしょう。

呉服座の外観。建物の前は縁日のような賑わいがある。また純和風の建築だが、正面の扉には洋風の枠飾りが施されている
photo:Akihiko Mizuno

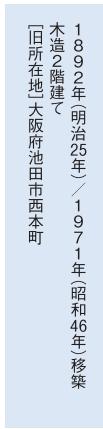
呉服座

江戸情緒を残す、貴重な芝居小屋建築

お祭り広場



寄席からの眺め。平場の両脇には花道が通る



小屋組の眺め。暗闇に束が立ち上がる(通常非公開)

明治の文化を伝える 文豪の住まい



photo:Hitoshi Kumamoto/Akihiko Mizuno

森鷗外・夏目漱石住宅の縁側に佇む猫の置物。晴れた日には社会見学の子どもたちで溢れる



森鷗外・夏目漱石住宅の外観。日当たりの良い縁側

小説家たちの家

明治村では、構想の早い段階から文豪の住まいを移築・復原することを決めていたといいます。それは、小説が激動の明治時代を生きる人間の内面を描写したからです。明治村に移築されている小説家たちの住宅は、建築的に特化したものではありませんが、そこで執筆された作品や作家にまつわ



書院奥の現像室の赤い窓（通常非公開）

のエピソードは、それと同じくらい重要な意味を持っています。

森鷗外・夏目漱石住宅



漱石の気分が味わえる書斎の眺め

の協力で移築されました。その後、森鷗外の年代記『自紀材料』から、鷗外も住んでいたことが分かり、明治村に復原されたことで広く知られるようになりました。

日当たりの良い書斎の縁側には猫の置物がおかれ、来客を和ませています。興味深いのが、小中学生や高校生たちがこの家に惹きつけられていることです。文豪の作品と同様、この住宅は多くの人を文学の世界へと誘っています。

幸田露伴住宅「蝸牛庵」



幸田露伴住宅「蝸牛庵」の外観。右側が土庇のある座敷

もう一人の文豪幸田露伴が若い頃に住んだのが、幸田露伴住宅「蝸牛庵」です。蝸牛庵はカタツムリのことで、露伴は自らの住まいをこう呼びました。

露伴が書斎にした和室は、大きな床と棚、それに書院を備えた立派な座敷で、縁側の広い土庇は、柱が外への視線を妨げないよう少し離されています。また2階の七畳間も見晴らしが良く魅力のある部屋です。

この住宅の隠れた見どころは、小さな現像室です。元電信技師だった露伴はカメラが好きで、撮影した写真をここで現像したといいます。明治村には他にも小泉八雲避暑の家などが移築されていて、展示物から作家の暮らしや交流の様子を伺うことができます。

その中でもとりわけユニークなのが、森鷗外・夏目漱石住宅です。明治を代表する文豪ふたりが時期を違えて同じ家に住んでいたという、まさに奇跡的な住宅です。

実はこの家は、東京の千駄木にあった頃から、夏目漱石が『吾輩は猫である』を執筆した家として有名で、取り壊しを惜しんだ所有者

明治村で昼食を



素敵な建物で美味しい食事をいただくのは、豊かな時間を過ごす最高の贅沢といえるでしょう。

明治村には、明治時代を彷彿させるようなグルメが多数あります。

ここではその中でも、特に建物と一緒に飲食を楽しめるスポットをご紹介します。

※本情報は、2023年4月現在のものとなります。最新情報につきましては、明治村公式ホームページをご確認ください。



photo: Hisao Takeuchi/Hitoshi Kumamoto/Akihiko Mizuno

文明開化をあらわすもっとも象徴的な食事だった牛鍋。牛鍋大井牛肉店では七輪に鉄鍋をかける当時のスタイルで楽しめる

大井牛肉店の牛鍋

まず明治村で外すことのできないお店といえば、牛鍋大井牛肉店です。かつては神戸市生田区（現中央区）にあり、多くの外国人居住者や地元の人々に愛された名店で、今も関西地方で4店舗を開いています。

建物としては、道路にミセを開いて奥に土間が通じる町家の形式ですが、外観が洋風で、特に2階のベランダには古典主義建築の柱があしらわれています。ずんぐりしたコリント式の柱と、鶴の装飾が付いたむくりのある破風との組み合わせが不思議なバランスを保



牛鍋大井牛肉店の外観。2階が店となっている



牛鍋橘コース。ご飯と卵、食後にシャーベットが付く



レンガ壁が美しい工部省品川硝子製造所の外観

て頬張れば、口いっぱいに肉の旨味が広がります。あとはご飯で追いかけるも良し、ビールで流し込むも良し。まさに至福の瞬間です。また、食後にされるシャーベットも嬉しい心遣いです。

次にオススメしたいのは、工部省品川硝子（がラス）製造所のバー「デンキブラン」です。赤いレンガの建物は元はガラス工場で、イギリスから職人や資材を移入して

創業されました。窓のかたちが左右で違うのは、中2階があるため。アーチ窓側がバー・カウンターで、四角い窓側はガラス製品の並ぶおしゃれなショップとなっています。

バー・カウンターでは日本初のカクテル「デンキブラン」などのレトロなお酒のほかコーヒー・スイーツも提供され、レンガの壁面とアーチ窓に囲まれた空間でグラスを傾ければ、さながら外国のバーにいるかのような気分が味わえます。

※牛鍋大井牛肉店・デンキブラン汐留バーの詳細情報については、明治村公式ホームページをご確認ください。
www.meijimura.com/gourmet/ 牛鍋・大井牛肉店/
www.meijimura.com/gourmet/denkibran汐留バー/

ち、面白い表情をつくっています。

ここで提供される牛鍋は関西風すき焼きです。砂糖をたっぷりまぶした鉄鍋に牛肉を敷き詰め、焦げ色がついたら秘伝の割下を入れます。沸々と湧いてきたら、焼き豆腐や野菜類を入れ、煮えるのを待ちます。ちなみに、ここでは白菜ではなく細く斜め切りにしたネギを入れるのが特徴です。

割下がしたたる牛肉を溶き卵にくぐらせ



デンキブランアイスとデンキブラン（スタンダード）